

## 所感

### —不安から面白さへ—

総合文化学科

酒 井 純

「新設されるスポーツ系の学科へ異動してくれるか？」

ジュニアスポーツ教育学科への異動が決まって、最初にしたのは「不安」だった。小さい頃から外で走り回るより家の中で遊ぶ方が好きで、体育は不得意と自他共に認める子どもであった。小学校の運動会での思い出が、徒競走で他の子が転んだことで一回だけビリにならなかったこと、というほど。そんな私がスポーツ系の学科でやっていけるのか？そんな不安ばかりが募った。

そんな不安解消のため考えたのが、自分の立ち位置はどこなのか、どんなことができるのかということだった。まず学科・分野としては新任だが、本学の教員としての2年の経験は活きるだろうということ。また実技以外、特に教養教育としての内容や学務の部分では、自分が役に立つ部分もあるのではないか、という考えに至った。

この「ジュニアスポーツ教育学科での私の役割は何か」という問いは、私が学科を離れるまで考えていたことである。その答えは、最終的に次の3つに集約された。

- ① 体育嫌いであったことを活かし、体育嫌いの理由と構造の学生への伝達
- ② 実技に直接的に関わらない、学務を通じたバックアップ
- ③ 素人から見たスポーツの魅力の学生への伝達

まず①についてであるが、ジュニアスポーツ教育学科にくる学生のほとんどが、体育・スポーツが得意であり好きな学生である。その一方で、保

健体育の教員となると体育嫌いな児童・生徒を教える機会もでてくる。このため、体育が嫌いになる理由やその構造を伝えることができないかと考えた。

一概に体育嫌い・スポーツ嫌いといっても、様々な理由が考えられる。もちろん多くの場合は「体を動かすことが不得意」ということに集約されるだろう。しかしながらその理由を分析していけば、成長が遅いことや体の構造の違い、また動体視力などの理由などもあるだろう。私自身体育嫌いな人間であったが、後にはスポーツ好きになっていることから考えても、その障害となっている部分を取り除くことで少しでも体育嫌いを減らせるのではないかと考えた。

次に②についてであるが、実際に新入生を迎えてみると、1年生ゼミの担当や親和行事での写真撮影、各種入試業務など様々な仕事をこなす必要があり、それまでの本学での2年間の経験を生かせる点も多くあった。特に他の先生方が学外へ出られることが多いということもあり、オープンキャンパスや入試での面接担当などの学務も積極的にこなしていくこととなった。

そして、それまで自分の趣味として続けてきた経験を活かして、スキーの授業を担当することとなり、専門ではないからこそ伝えられる「スポーツの面白さ」があるのではないかと考えるようになったのが③である。

入試の面接などで「スポーツのいい点は何ですか？」と聞くと、心身の健康などとあわせてよく「礼儀が身につく」と返ってくる。しかし一方で「面

白さ」という答えはあまり聞いたことがない。もちろんこの「面白さ」には、自分の技術が向上していく面白さや、試合に勝った時の充足感、また負けた悔しさ、仲間との感動の共有、見ることの楽しさなどもすべて含んでのことである。私自身、スキー、自転車、スキューバダイビング、モータースポーツ、ビリヤードなど様々なスポーツにチャレンジしてきたが、これらに夢中になれたのはやはり面白かったからである。

もちろん、どの学生もこの面白さを知った上でジュニアスポーツ教育学科に入学してきているはずであるが、そのことをもう一度再確認してほしい、という思いが③へ結実している。

これらのことから、私の育てたい学生像は「体育嫌いをスポーツ好きにできる体育の先生」となった。自分自身、大学時代に受けた共通教育科目としての体育の先生の影響で、スポーツを好きになったこともあり、こんな先生が一人でも二人でも出てきたらという思いが強い。

現在は他学科の所属となり、スキーの授業以外では学科への関わりは減ってしまっている。しかしながら、自分を受け入れてもらい、教員としての幅を広げることもできた本学科への愛着は、薄れていないと自信を持っていえる。ぜひ今後も、ジュニアスポーツ教育学科がより発展し、多くの優れた卒業生を送り出していくことを望み、微力ながらも協力できればと考えている。